

学術の世界から

土屋俊
(千葉大学)

情報社会のデザイン シンポジウム2006
クロージング・セッション パネル
12月1日(金) 東京・汐留

「社会」? 「日本の社会」?

- 日本? 世界?
 - 一国のシステムについて議論することの意味
 - 「学」はもともと普遍的。今、それが実現する可能性がでてきた
- 知識はもともとcollectiveかつparasitic
 - 知識の継承: 教育
 - 「学問」システムの崩壊?
 - 所詮はスポンサーつきの営み
 - 歴史による選択としての現代の高等教育システム(安い)
- 消費者の選択?: 人間を基礎を基礎にすることの危険
 - 保守主義的傾向の覚悟
 - 快楽主義的傾向の覚悟
- デザイン過程におけるcollective intelligence
 - 技術者がそんなことを考えるおこまがましき
- でも、「国」の政策って?
 - 国民国家の枠組みが情報社会になじむのか

学術情報の奇妙な特徴。

しかし意外と示唆的かも、、、

- 小さいマーケット・寡占と超ロングテール
 - 世界で数兆円
 - 1社が25%。数社が10%前後。数千から数万のテール
- 無条件に(たぶん?)とつくに「国境のない世界」
- 膨大なシャドウワーク
 - 無償の査読—エリティズム
 - 奇妙なintermediaryの振る舞い
- アーカイブ・ロールの逆転
 - 下流側 ⇒ 上流側(ほぼ方向は出つつある)
- オープン・アクセスとビッグ・ディール
 - すべての(学術)情報をすべての人が利用可能
 - 利用可能性概念と費用負担概念との分離
 - 機関リポジトリ